「不定推量」と「質問表現」
――“ダロウ”をめぐってⅡ――

三　宅　知　宏

【キーワード】：不定推量，質問表現，“ダロウ”，“ダロウカ”，
ポライトネス（丁寧さ）

1.　はじめに

本稿は、“ダロウ”という形式が疑問文に生起した場合の用法、およびその用法間の関係について考察することを目的とする。そしてそのような考察を通して、日本語の質問表現における、“ダロウ”が生起した疑問文の特性を記述、分析する。

三宅（2010）（以下、前稿）では、いわゆる平叙文における“ダロウ”について詳細な考察がなされたが、“ダロウ”には、他の「認識的モダリティ」が表される形式とは異なる、疑問文にも生起可能という性質があり、そのような場合の“ダロウ”にも考察を加えなければ、十分な研究とはならないということが、本稿の動機付けである[1]。

結果として、前稿と本稿とをあわせることにより、“ダロウ”という形式によって表される意味、用法の総体が明らかにされることになる。

本稿では、大きく次のような3点が主張される。

①疑問文に生起した“ダロウ”は、「不定推量」（話し手の想像の中で命題が不確定であると認識すること）と呼ぶ基本的な用法を持つ。

②“ダロウ”が生起した疑問文は、聞き手に対しての質問表現として用いられた場合、ある特定の条件の下で、「弱い質問」（聞き手に不確定

な応答をする余地を残す質問)、「丁寧さの加わった質問」(通常の質問文よりも丁寧さが加わった質問)という用法を持つ。

③前稿において導入された「プロトタイプ」および「スキーマ」という概念を用いて言えば、「不定推量」「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」の用法間には「プロトタイプ」としての「不定推量」からの「拡張」の関係があり、さらに各用法は前稿において考察された平叙文に生起した場合の“ダロウ”と同じ共通の「スキーマ」を有している。

また、以上の論旨に加えて本稿には、副次的にではあるが、「語用論」における「ポライトネス」というコミュニケーションにおける一種の方略(ストラテジー)に関する研究とかかわりを持つという側面もある[2]。

本稿は以下のような構成をなす。まず **2.** において、基本的な用法である「不定推量」について仮説を立てる。そして **3.** において、分析の傍証となるイントネーションの特殊性について観察した後、**4.** において、「不定推量」から拡張用法である「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」について、**5.** において、平叙文、疑問文の区別なく“ダロウ”という形式が有する「スキーマ」について、それぞれ論じる。**6.** においてまとめを行う。

2. 不定推量

以下では、便宜上「疑問文に生起した“ダロウ”」のことを、“ダロウカ”と称することにする。その際、丁寧体の“デショウカ”も含まれるものとする。また、いわゆる「不定語疑問文」においては、末尾の“カ”は省略可能であるが、そのような「不定語疑問文に生起し、かつ“カ”が省略されている場合の“ダロウ”」も、“ダロウカ”には含まれているものとする。次のような例を参照されたい。

(1) 明日は雨が降るダロウカ　　[肯否疑問文]
(2) 明日は誰が来るダロウ(カ)　　[不定語疑問文]

この“ダロウカ”の意味を考えるために、前稿において分析された平叙文に生起した場合の“ダロウ”の「スキーマ」と、それが具体化した最も基本的な用法（「プロトタイプ」）について振り返っておこう。

まず、「文の意味内容（命題）を現実の世界ではなく、想像の世界においてとらえる」、換言すると「命題を想像の世界において認識する」ということを、略して「想像の中での認識」と呼ぶことにすると、この「想像の中での認識」が、“ダロウ”という形式の「スキーマ」ということであった。そして、平叙文の場合、この「スキーマ」が特定の文脈を必要とせず、最も自然な形で具体化したものが「推量」の用法であった。「推量」は「話し手の想像の中で命題を真と認識する」と定義された。

それではこの“ダロウ”がいわゆる疑問文に生起した場合はどうであろうか。前述のような「スキーマ」からすれば、疑問文への生起は原理的に不可能ではないことが分かる。“ダロウ”は「スキーマ」のレベルでは、命題の真偽に関しては何も語っておらず、単に「想像の中での認識」が表されるだけだからである[3]。

改めて前掲の（1）（2）や、次のような例における“ダロウカ”をみてみよう。

(3) 昨日の朝から、おかあさまはずっとぼくのそばにいてくれたのだろうか。
(4) 大西は何をしているんだろう？ この騒ぎが聞こえないんだろうか？
(5) 大戸はこれからどうするのだろう。これから先もボクシングを続けていかなくてはならないのだろうか。
(6) 酒を飲めない私などには分からないが、酔うと人間は他人の迷惑というものを考える能力がなくなるのだろうか。
(7) リクルート“疑惑”は果たして「第四の疑獄」に発展するだろうか。

上例のような“ダロウカ”は、「命題が不確定である（命題の真偽が定められない）と、想像の世界において認識する」という用法を持っていると思われる。これを「不定推量」と呼ぼう。

(8)「不定推量」：話し手の想像の中で命題が不確定であると認識する

これは、“ダロウ”の持つ「想像の中での認識」という「スキーマ」が疑問文において自然な形で具体化したものであると言える。疑問文は無標の場合、命題が不確定であることが表されるものであり、そのような疑問文の性質と“ダロウ”のスキーマが自然な形で合成されたものが「不定推量」と見なせるからである。なお、このような具体化の過程は、“ダロウ”が平叙文に生起した場合には「推量」という用法を持つに至るという具体化の過程と同種のものと考えられる（前稿を参照）。

さて、“ダロウカ”によって表されるこの「不定推量」の特徴は、広義の疑問表現の一種とは言えるが、あくまで話し手の認識を表すものであって、本質的に聞き手への質問行為を前提としていないということにある。いわゆる独り言や心内発話において自然に用いられることがそれを裏付ける。また、話し手の認識が表されたものであるということは、次例のように、“～ト思ウ”“～ト考エル”のような動詞の引用節内に自然に生起できるということからも分かる。

(8) いったいこれは何なのだろう、と思った。いったいこれらの光景はみんな何を意味しているのだろう、と。
(9) そしてあの父親は本当に僕に緑のことをよろしく頼むと言おうとしたのだろうかと考えてみた。

以上はすべて独話における例であるが、対話において、すなわち聞き手を意識した文脈においても、「不定推量」は表され得る。

(10)「何人くらい来ると思う？」「さあ、10 人くらいだろうか。」

(11)「失礼ですが、先生はどれくらいのあいだ、手術室にいらっしゃらなかったのですか」答えにくいのか、野中医師はしばらく黙りこんでいたが、やがてぽつりとつぶやいた。「十五、六分でしょうか」

(12) うちは滋賀でトップレベルでも、大阪では十番目くらいでしょうか。攻撃力は誇れるが、投手力と内野の守備が弱い気がします。

上例のような文には質問性は全くなく、単に命題が不確定であると認識していることを表す表現になっている。言い換えると「不定推量」が表されているということである。

3. “ダロウカ”とイントネーション

ここでは、次の **4.** における分析の傍証となる“ダロウカ”の文のイントネーションの特殊性について言及しておく。なお、以下では、“↑”という記号は上昇のイントネーションを表すものとする。

(13) a. この本は、おもしろかったか

b. この本は、おもしろかった（↑）

上例のように通常の質問文は文末の“カ”を取り除いても、文末のイントネーションを上昇にすれば意味的に等価な文ができる。しかしながら“ダロウカ”の文は次例が示すように、この点に関して矛盾する。

(14) a. この本は、おもしろかっただろうか

b. この本は、おもしろかっただろう（↑）

上の b. はいわゆる「確認要求」の意味になってしまい、a. とは意味的に等価ではない。“ダロウカ”の“カ”は文末イントネーションによる代行が不可能であると言える。

また、そもそも“ダロウカ”の文は、上昇のイントネーションを取ることができないと思われる。次例を参照されたい。

(15)この本は、おもしろかっただろうか（*↑）
(16)どの本が、おもしろかっただろう(か)(*↑)

念のため付言しておくが、これは、丁寧体の“デショウカ”の場合であっても同様である。

(15)’この本は、おもしろかったでしょうか（*↑）
(16)’どの本が、おもしろかったでしょう(か)(*↑)

以上の事実は、“ダロウカ”における“カ”が、通常の質問文を形成する“カ”とは異なるということを示している。また、上昇のイントネーションが聞き手に対する何らかの働きかけと関係するとすれば、この事実は、“ダロウカ”によって表される「不定推量」が本質的に聞き手への質問性を持っていないこと、換言すると、聞き手への要求性を持っていないことの証拠となる。そして、次の **4.** で考察する、“ダロウカ”が「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」という「不定推量」から拡張された用法を持つということの傍証となり得るであろう。予告的に言えば、「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」は、通常の質問文に比して、聞き手への要求性が乏しいということにその特性があるからである。

4. 「不定推量」からの拡張用法

4－1 「弱い質問」

まず通常の質問文との対比からはじめよう[4]。次例は、聞き手もまだその映画を観ていないことが明らかな状況において発せられたものと仮定する。なお、以下で、文頭に付された“#”は、その文が当該の文脈

では不自然な発話になることを示すものとする。

(17) #今度上映される「タイタニック 2」って映画、面白いか？／ですか？

上例のように、通常の質問文は、前述のような状況を仮定する限り、極めて不適切な発話となってしまう。聞き手が話し手の要求する情報を提供できないことが、話し手にとって明確な状況での発話であるから、語用論的に明らかに適切性に欠けると言えるからである。それに対し、次例のような“ダロウカ”の文は、(17) と同じ状況においても全く自然であり、したがって通常の質問文とは異なった表現効果を持つと言える。

(18) 今度上映される「タイタニック 2」って映画、おもしろいだろうか？／でしょうか？

この場合の“ダロウカ”の文の表現効果は、確定的な情報でなくても、何らかの関与性があると思われる情報を要求する、とでもいうようなものだと思われる。例えば (18) に対する応答としては「あの監督ならきっとおもしろいんじゃない」や「前作が良すぎたから続編はたぶんだめだよ」等のように予想を含んだものなどが考えられる[5]。確定的なものでなくてよいことから、情報を要求するといっても、その要求性は極めて弱いものである。聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問であると言ってもよい。これを「弱い質問」と呼ぶことにする[6]。

(19)「弱い質問」：聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問

以下に類例をあげる。

(20)「ジープでも無理だろうか」「いや、ジープでもとてもはいれんべ。

さっきの電話じゃ北電の除雪車が何も見えんてあきらめたらしいから」

(21)「十ラウンド、続かないでしょうか…」「わからない。これ、誰にもわからない。内藤、走りました。二月から走って、そとの体よくなった。でもなかの体、僕にもわからないよ」

(22)「今度はどうなるだろう」私が訊ねた。「さあ…」内藤は考え込み、しばらくしてから、「わからない。…だから見たいね」

いずれも「弱い質問」が表されているとみて問題ないと思われる。

さてこの「弱い質問」は、“ダロウカ”の文が本質的に聞き手への質問性を持っていないにもかかわらず、対話で用いられた場合に、語用論的推論により、聞き手の応答（反応）を誘発してしまうことから生じたものと言え、その点で「不定推量」から拡張した用法であるとみなせる。

このような語用論的推論による「拡張」のメカニズムをさらに詳しく言うと、次のようになる。

「不定推量」は、命題が不確定であると話し手が認識していることを表すのみであって、聞き手への質問性／要求性は持たないものであった。ところで、「命題が不確定であると話し手が認識している」ということは、聞き手への質問行為における必要条件であると言える。質問行為は一般的に、話し手にとって不確定なことを確定的にするために、聞き手に情報を要求するものだからである。とすると、「不定推量」が表された文を発話するということは、質問行為における必要条件のみを表明していることに他ならない。図示すると次のようになる。

(23)「通常の質問文」：［命題が不確定であるとの認識］＋［聞き手への要求］

(24)「不定推量」　　：［命題が不確定であるとの認識］＋　　ϕ

したがって、「不定推量」が表された文が、聞き手に向かって発話された場合に、一種の「質問」（情報を要求する行為）として解釈されたと

しても、それは「間接的」ということになる。聞き手は、要求まではされていないにもかかわらず、話し手が「命題が不確定であるとの認識」をあえて表明するということは、何らかの情報を欲しているのだと推論し、可能な限り関与的な情報を提供するに至る、ということであろう。「弱い質問」は、このような「間接性」に基づいて成り立つ用法であると思われる。間接的な要求表現でしかないため、要求性の乏しい表現になるということである[7]。

このような過程を経て、「弱い質問」は「不定推量」から「拡張」した用法であると考えられる。

以上、述べてきた「弱い質問」について2点、付言しておく。

1点目は、この「弱い質問」と類似した表現に、“～ト思ウ（カ）”という表現があるということである。

(25)［(17) と同じ状況において］
今度上映される「タイタニック2」って映画、おもしろいと思う(か)？

そのように“思う”かどうかをきいているのであって、直接的に“おもしろい”かどうかをきいているものではないので、やはり間接的であり、結果として「弱い質問」に類似した表現になるのであろう。本稿の論旨から逸脱するため、この“～ト思ウ（カ）”を伴った質問表現の詳細については、別稿を期すこととしたい。

2点目は、“ダロウカ”の文は、次例のように、いわゆる「なぞなぞ」や「クイズ」において多用されるということである。

(26)凱旋門と自由の女神ではどちらが先に作られたでしょう？
(27)四月四日は誰の誕生日でしょう？

いわゆる「なぞなぞ」や「クイズ」のことを「クイズ質問文」と呼ぶこ

とにすると、「クイズ質問文」は、当該の情報を聞き手が有していることを前提としていない質問表現であると言える。そのような質問表現において“ダロウカ”の文が多用されるということは、“ダロウカ”の文が「弱い質問」を表すということをふまえれば、当然の帰結ということになろう[8]。

4−2 「丁寧さの加わった質問」

ここでも通常の質問文との対比からはじめよう。次例を見られたい。

(28) a. ご満足いただけましたか？
　　b. ご満足いただけたでしょうか？
(29) a. どちら様ですか？
　　b. どちら様でしょうか？

上例は、通常の質問文を用いても自然な文脈、すなわち聞き手が確定的な情報を提供することができる文脈での発話である。そして、上例をみる限り、質問性という点では、通常の質問文と“ダロウカ”の文との間に相違は感じられない。どちらの表現も、聞き手に対して確定的な情報を要求していると見なされる。しかし全く同じというわけではなく、b. の“ダロウカ”の文は、a. の通常の質問文と比べて、より「丁寧」な表現になっているという点に違いが見られる。以下に類例をあげる。

(29)「大体のところはおわかり頂けましたでしょうか？」
(30) Q：歴史的仮名遣いの文を読む時、どういう場合にハ行音をワ行音に読むのでしょうか。
　　A：古文のハ行音の読み方には次のような原則があります。
(31)「お決まりでしょうか？」「アメリカン」
(32)「先程の、血が黒くなったということですが、それは意識がなくなったことと関係があるのでしょうか」「もちろんあります」

上例は全て、通常の質問文に換えても適切であるが、しかしいずれも通常の質問文よりも丁寧であると感じられる。“ダロウカ”の文は、通常の質問文を用いても適切な文脈において発話された場合、通常の質問文よりも、より「丁寧」な表現になると言えるのである。

“ダロウカ”による、このような表現効果も一つの用法と考え、「丁寧さの加わった質問」と呼ぶことにする。

(33)「丁寧さの加わった質問」：通常の質問文よりも丁寧さが加わった質問

それでは、なぜ“ダロウカ”の文の方が通常の質問文よりも丁寧な表現になるのであろうか。この問題を考えるに際して、“ダロウカ”に関して既に明らかにしたことを振り返っておこう。

“ダロウカ”は基本的な用法として「不定推量」を持ち、さらにそこから拡張した「弱い質問」という用法を持っていた。「弱い質問」は、命題の不確定性の認識という質問行為の必要条件だけを述べていることにより、間接的に一種の質問表現となるものであった。

この“ダロウカ”と「丁寧さの加わった質問」の用法の関係を考える上で、少し視点を変えて、「命令」や「依頼」等の「行為」を要求する表現をみてみよう。「情報」か「行為」かの違いはあっても、両者ともに聞き手に対して要求をするという点では共通しており、類推を働かせることができると思われるからである。

前稿でも述べたところがあるように、聞き手に対する行為要求の表現において、直接的にその要求を行うのではなく、その必要条件のみを表明することによって、間接的に要求することが表されるに至るということはめずらしいことではない。

(34)静かにしてほしい

例えば、上例は聞き手に向かって発話された場合、静かにしてくれるように依頼するということが表され得る。［私はあなたが静かにすることを望んでいる］ということは、静かにしてくれるように依頼するという行為が成立するための必要条件であると言える。上例は必要条件のみを表明することにより、間接的に依頼表現として成立しているのである。

重要なことは、一般に、要求表現において、間接性が加われば丁寧さが加わるということである。次例を見られたい。

(35)静かにしてください
(36)静かにしてもらえませんか

上の（36）は字句どおりに解釈すれば、静かにしてもらえるかどうかをたずねていることになり、直接的な依頼表現ではない。したがって（35）に比べてより間接的であると言え、そしてその結果、より丁寧な表現になっている[9]。

このような、聞き手に対する行為要求の表現における「間接性」と「丁寧さ」との関係は、“ダロウカ”の分析への類推となると思われる[10]。“ダロウカ”の場合は、「行為」ではなく「情報」であるが、要求することには変わりはないからである。

聞き手への要求表現において、間接性が加われば丁寧さが加わると言えるのであれば、直接的に情報を要求することを表す通常の質問文よりも、間接的に情報を要求することになる“ダロウカ”の文の方が、当然、丁寧さが加わるということになる。

「丁寧さの加わった質問」の用法はこのような過程を経て、「弱い質問」から拡張した用法であるとみなせる。すなわち、「丁寧さの加わった質問」における「丁寧さ」は、発話の間接性に、その源を求めることができるのである。

まとめると、次のような拡張関係があるということである。

(37)「不定推量」------→「弱い質問」------→「丁寧さの加わった質問」

（“------→”は「拡張」を表す）

上のような拡張関係においては、「不定推量」が拡張の始発、すなわち「プロトタイプ」ということになる。

以上、述べてきた「丁寧さの加わった質問」について２点、付言しておく。

１点目は、他言語との対照ということである。例えば、英語において“I wonder ～”という表現は、統語的に平叙文であって疑問文でないことから明らかなように、話し手が動詞“wonder”の「補文」の内容を不確定と認識していることを表すだけで直接的に質問する意味は有していない。次例を参照されたい。

(38) I wonder where he has gone.　［彼はどこに行ったのだろうか］
(39) I wonder if he is at home.　［彼は在宅だろうか］

このような“I wonder ～”という表現を、通常の質問文（統語的手段により直接的に質問することを表し得る文）が発話できる状況で発話した場合には、間接的に質問していることが表される。

(40) Do you like Japanese food?
(41) I wonder if you like Japanese food.

その場合、直接的に質問することが表される（40）よりも、間接的に質問していることが表される（41）の方が丁寧に感じられる。

このように、質問表現における「間接性」と「丁寧さ」の問題は、日本語という個別言語だけではなく、言語普遍的に考えることが可能であるように思われる。より多くの言語において、検証してみることが望まれる。

2点目は、いわゆる「ポライトネス」の研究とのかかわりである[11]。「ポライトネス」は、コミュニケーションにおける一種の方略（ストラテジー）に関する問題を扱うものであり、いわゆる「語用論」における一分野である。ここでの「丁寧さの加わった質問」に関する分析は、明らかにこの「ポライトネス」の研究とかかわりを持っている。「丁寧さの加わった質問」に関する分析は、「意味論」の領域と「語用論」の領域の接点と言えるのである。

本稿での分析はあくまで「意味論」の範囲内で行われたものであるが、分析の結果は、「ポライトネス」という「語用論」の研究にも大いに貢献できるものと考える。

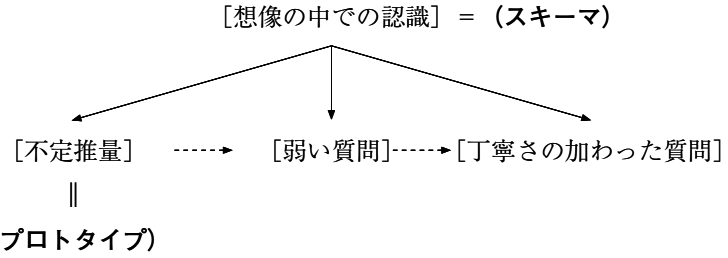
5. “ダロウ”の「スキーマ」再考

前述のように、“ダロウカ”が持つ諸用法の間には、「不定推量」をプロトタイプとし、そこから拡張された用法としての「弱い質問」、「丁寧さの加わった質問」があるという拡張関係がみられた。プロトタイプに基づく分析が有効であることが示されたと言えよう。

さらに「スキーマ」に基づく分析も可能であると思われる。

何よりもまず、拡張の源である「不定推量」は、前述のように“ダロウ”の持つ「想像の中での認識」という「スキーマ」が、疑問文において自然な形で具体化したものと言えた。そして、「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」においても、これらの用法を支える「間接性」が「不定推量」に求められる以上、やはりこの「スキーマ」は共通しているとみる必要がある。すなわち、これらの用法もまた「不定推量」と同じく、「想像の中での認識」という「スキーマ」の具体化であると分析するということである。図示すると次のようになる（図中の“⟶”は「具体化」を、“⇢”は「拡張」を表す）。

(42)



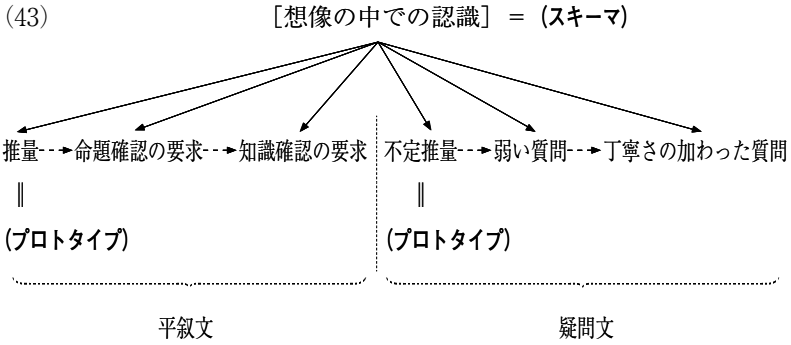
上は、疑問文に生起した場合の“ダロウ”すなわち“ダロウカ”についてのみの分析であるが、この「スキーマ」は平叙文に生起した場合の“ダロウ”と共通するものであることから、前稿における分析と総合することができると思われる。

つまり、“ダロウ”という形式の持つ意味、用法の総体は、次のように分析される。

“ダロウ”という形式は、平叙文、疑問文の区別も超えて一つの「スキーマ」を持つ。それは「想像の中での認識」ということである。これが最も自然な形で具体化した用法が、平叙文においては「推量」であり、疑問文においては「不定推量」である。「推量」には、ここから拡張した用法として「命題確認の要求」「知識確認の要求」があり、「不定推量」には同じく「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」がある。したがって“ダロウ”という形式は、「推量」および「不定推量」という二つのプロトタイプ持つと言える。

以上のことを図示すると次のようになる。

(43)



6. おわりに

本稿において、考察したことをまとめると、以下のようになる。

“ダロウカ”すなわち疑問文に生起した“ダロウ”には「不定推量」「弱い質問」「丁寧さの加わった質問」という用法が認められる。次はそれぞれの定義の再掲である。

(8)「不定推量」：話し手の想像の中で命題が不確定であると認識する
(19)「弱い質問」：聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問
(33)「丁寧さの加わった質問」：通常の質問文よりも丁寧さが加わった質問

これらの用法間には、「不定推量」を「プロトタイプ」とする拡張の関係がある。次はこれを示す図の再掲である。

(37)「不定推量」------→「弱い質問」------→「丁寧さの加わった質問」

そして、これらの用法は全て、共通の「スキーマ」である「想像の中での認識」から具体化したものである（(42) を参照)。

また、この「スキーマ」は、前稿で考察した平叙文に生起した場合の“ダロウ”とも共通するものであり、結果として、本稿の考察と前稿の

考察をあわせると、“ダロウ”という形式の持つ意味、用法の総体が明らかになった（(43) を参照)。

【注】

1. 森山（1989a）等で一般に言われていることであるが、“カモシレナイ”や“ラシイ”等の“ダロウ”以外の形式は、疑問文に生起することが極めて難しい。
2. 「ポライトネス」という概念／用語は、日本語研究においてあまり議論されることがなく、「ポライトネス」という片仮名表記自体なじみの薄いものであると言わざるを得ないが、「丁寧さ」という訳語を用いると、日本語ではどうしても語彙的な敬語、とりわけ丁寧語の問題と混同されがちなので、あえて片仮名表記とすることに長所も見出せる（宇佐美（1998）を参照)。
3. ここで注意しておきたいのは、「推量」が疑問文に現れるわけではないということである。もしそうだとしたら、たとえ想像の中とは言え、「命題を真であると認識する」ということと、疑問文であるということは明らかに矛盾する。ここで問題としている“ダロウ”の意味は、「推量」という用法よりも一段上のレベルの「スキーマ」としてのそれである。「推量」という用法は、あくまで“ダロウ”の「スキーマ」が平叙文において具体化されるものである。
4. ここでいう「質問文」は、話し手が単に疑問に思うだけでなく、聞き手にその疑問の回答を要求することまでを含むものである。
5. その他にも、「さあ、わからない」のように判断を回避したものも考えられる。
6. “ダロウカ”の文が、ここで述べたような、通常の質問文では不適切な表現になる文脈においても発話可能であるということを、最初に指摘したのは、管見の限り、三宅（1993）である（発表年月では先行するものに森山（1989ab）があるが、これは三宅（1993）のもとになった研究発表の発表資料に基づくものである)。以降、この事実を指摘する論考は複数、存在するが、いずれも「このような状況において発話できる」ということを言うのみで、「その場合にどのような表現効果を持つか」ということに関しては等閑視している。
7. 聞き手への要求表現における「間接性」の問題についての詳細は、前稿

でも述べたように、三宅（2007）を参照されたい。

8. これもまた指摘にとどめざるを得ないが、このような「なぞなぞ」や「クイズ」の場合でも、やはり“ダロウカ”は多くの場合“～ト思ウ（カ）”に置き換えが可能である。
9. 間接的な要求表現が成立するためには、必要条件を表明するだけでなく、この（36）のように必要条件が満たされているかどうかをたずねるという方法もあり得る。
10. 聞き手への要求表現における「間接性」と「丁寧さ」の関係についての詳細も、三宅（2007）を参照されたい。
11. 「ポライトネス」の研究としては、Leech（1983）の「丁寧さの原理（Politeness Principle）」や、Brown and Levinson（1987）の「ポライトネス理論」等があげられる。

【参考文献】

宇佐美まゆみ（1998）「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究教育年報（1997 年度）』東京外国語大学

河上誓作（1983）「文の意味と発話文の意味」『ことばの科学』九州大学出版会

河上誓作（編著）（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

西山佑司（1983）「発話行為」『英語学体系 5 意味論』大修館書店

仁田義雄（1987）「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

早瀬尚子・堀田優子（2005）『認知文法の新展開―カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

南不二男（1985）「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店

三宅知宏（1993）「派生的意味について―日本語質問文の一側面―」『日本語教育』79

三宅知宏（1995）「『推量』について」『国語学』186

三宅知宏（1999）「モダリティとポライトネス」『月刊言語』28-6

三宅知宏（2000）「疑念表明の表現について―カナ・カシラを中心に―」

『鶴見大学紀要』37
三宅知宏（2007）『日本語と他言語―ことばのしくみを考える』神奈川新聞社
三宅知宏（2010）「『推量』と『確認要求』―“ダロウ”をめぐって―」『鶴見大学紀要』47（本誌所収）
宮崎和人（1993）「『～ダロウ』の談話機能について」『国語学』175
宮崎和人（1995）「『～ダロウ』をめぐって」『広島修大論集（人文編）』35-2 広島修道大学人文学会
宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現―疑いと確認要求―』ひつじ書房
森山卓郎（1989a）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版
森山卓郎（1989b）「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育1：日本語学要説』明治書院
森山卓郎（1992）「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101
山口堯二（1989）「疑問表現の推量語」『国語と国文学』66-7
山梨正明（1986a）「法助動詞の語用論―発話の間接性と慣用性をめぐって―」『英語青年』131-10
山梨正明（1986b）『発話行為』大修館書店
Brown,Penelope and Stephen C.Levinson（1987）*Politeness* Cambridge University Press
Grice,H.P.（1975）“Logic and Conversation”in Cole and Morgan（eds.）*Syntax and Semantics Vol.3:Speech Acts* Academic Press
Langacker,Ronald W.（2000）“A Dynamic Usage-Based Model”in Michael Barlow and Suzanne Kemmer（eds.）*The Usage-Based Models of Language* CSLI Publications
Leech,Geoffrey（1983）*Principles of Pragmatics* Longman
Searle,John R.（1975）“Indirect Speach Acts”in Cole and Morgan（eds.）*Syntax and Semantics Vol.3:Speech Acts* Academic Press